

一学期の幼児の遊びから

長山篤子



一学期に、幼児が遊んだ遊びの記録より

一学期に幼児が遊んだ遊びの記録をみますと、私たちの園では遊具を対象とし、全身を動かし、跳んだり、かけまわったり、といった運動遊びに属する遊びが大半を占めていました。この中で特に、一番好まれたのが、タイヤ遊びで、全員(年長も年少も)

大変興味を示していました。その他、年少児は、固定遊具(ジャングルジム、タイコばし、ブランコ、スベリ台etc.)を使用した遊び、年長児は、固定遊具を利用した遊び(例えば、ブランコ競争、ジャングルジムを使ったキャプテンウルトラごっこ、鬼ごっこetc.)が多く、飛箱、マットを利用し、ピルわたり、つなわたり、スキー、などの遊びも記録されています。ボール遊びでは年少児の投げたり受けたたりする遊びがよく行なわれていました。

★一学期でするので比較的ルールも簡単で、人数も少なく、道具を対象とした遊びが目立ちましたが、幼児にとって「おもしろい、楽しい」といった実感が持てるように、また、思いきり羽がのばせるようにと、出来るだけ制限をなくし、彼らから、わき出てくる遊びを見守っていました。

その他ごっこ遊びを拾ってみますと、入園式の翌日から行なわれた電車ごっこ、電話ごっこ、動物ごっこ、おでんやさん、おふろやさん、色水やさん、円ばんごっこ、動物園ごっこ、乗物ごっこ、おうちごっこ、舟ごっこ、帽子やさんごっこ、つりぼりやさんごっこ、お医者さんごっこ、地下鉄ごっこ、ゴーストごっこ、遊園地ごっこ、動物電車ごっこ、花屋さんごっこ、アイスクリームやさん、飛行機ごっこ、宇宙ごっこ、大工遊び、ダンスごっこ、製作遊び、粘土なげ、楽隊ごっこ、など、大変種類が多く記

録されています。

★以上のごっこ遊びは、運動遊びと異なり、教師が、きっかけをつくったり、助言を与えたり、ぼんやりしてなかなか遊びにとりつけない幼児に誘いかけをしたりした、教師側の直接の働きかけがあった遊びでした。クラスごとに室内に入っただけのままとった活動はほとんどありませんでしたので、以上のような遊びが主体となつて、一学期を終わりました。

以上の遊びの種類の中より、幼児が一番好きで、毎日した遊びの『タイヤ遊び』と、教師の方で、環境づくりをし、それを利用して、発展させていった遊びの『宇宙ごっこ』を紹介いたします。

タイヤ遊び

昨年の運動会にしたかけっこ競争から、子どもたちは、幼稚園の前の道（行きどまりの道）で毎日かけっこ、リレーをして遊んでいた。ただ走ることがつまらなくなると、タイヤ（バンクしたタイヤを自動車工場より六コほどもらってきたもの）をころがして遊びはじめた。四月になると、元気のよい年長男児が、「今度は、僕たちが大きい組になったからたくさん使えるんだ」と大張り切りで、このタイヤにとびついてきた。（四月下旬）

最初は、五、六名の年長の男児が中心になり、ころがして競争

したり、ころがす練習をしたりしていたが、五月に入ると、タイヤあそびが全体に受け入れられるようになった。

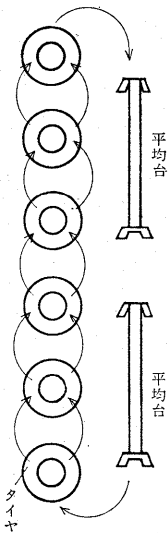
●タイヤをうまくころがすことの出来る男児が集まり、一列になつて競争する。雨天の日を除いて、毎日、三十分～一時間半、この競争をする。六月下旬、暑くなりはじめても、毎日お昼近くまでこの遊びに熱中した。メンバーはきまり、八名は必ず入りあと三～四名が入りする。

●一列に並んで競争の他、二組に分れてリレーをする。一回ごとにジャンケンで組分けをし、メンバーを変える。

●ブレーキあそび——タイヤころがして疲れると、個々に、ブレーキあそびと称し、タイヤをころがして急に止めるあそびを考える。一定の線の所で、誰が正確にとめられるか競争する。

●タイヤ衝突、二組が向かいあって、タイヤをころがし、ぶつかけ合いをする。

●タイヤをたおして一列にならば、その上をとび跳ねながらわたって行く。帰りは平均台をわたってくる。



この遊びは女兒も加わり、時には、レコードを外にもち出し、レコードのリズムに合わせてはねてわたっていくこともあった。

(六月上旬) またM子の考えで、タンプリンをもち出して、そのリズムに合わせて、とんで行く日もあった。年少児は、とぶことは出来ないが、穴の中を歩いてわたって参加する。(合計三十名くらいの子どもが参加)

●タイヤを三つ重ねて、その上からとびおる。

●タイヤの上に二人ずつ乗って手をつなぎ、ジャンプして遊ぶ。

●鉄棒の下にタイヤをもつていき、鉄棒につかまってジャンプしたり、鉄棒をまわる。年少児で一人遊びをしたり、二人くらいのお友だちで話をしながら楽しむ。

●円ばんごっこ。年長男児五名、タイヤを円ばんにして、転がしたり、中に入って、かかえ走る。ごっこ遊びとしてはあまり発展しないが、時々円ばん遊びをする。

●池をつくる。タイヤが池になり魚つりをして遊ぶ。またポータになって、庭をひいてまわり遊ぶ。

以上のようなタイヤ遊びが行なわれた。タイヤは、みんなの人氣の的になり、二学期、三学期も毎日続けられ、運動会にも用いて競技を楽しんだ。

★タイヤ遊びを通して話し合われたこと

①タイヤを年長児だけで独占してしまうが、どうしたらよいか。

K 昨年、僕たちもやりたかったけれど、大きい組に入れてもらえなかった。練習して上手になってから仲間に入れるから、それまで、がまんしろ。

N 仲間に入れると僕たちの競争がつまらなくなる。僕たちが使っていない時に練習して。

Y もう少し大きくならないと無理だ。

などタイヤころがしにはどうしても仲間に入れられないとの意見が出た。体力的にも能力的にも、年少児は無理なので、いくつか練習のためにタイヤを貸す。タイヤころがし以外の遊びには仲間に入れるという話し合いになった。(実際にはなかなか年少児に貸すことが出来ない)

②タイヤ遊びのルールを自分たちで定める。

タイヤのとめ方、競争の仕方、組分け方、ジャンプ遊びの時の順序、タイヤ競争をする時の約束、などを、それぞれのグループできめていた。

③タイヤの大、小によって速度が異なることを発見。競争の時は同じ大きさのものを使うか、大小を交互にしてみる、などいろいろなことを試していた。

④ころがし方の研究、競争をしているグループが集まり、まっすぐにするか、少し斜めにするかなどを話し合う。

⑤ジャンプをするときは、体操のレコードか行進用のレコードで

ないと、つまらない、などの意見も出る。

★教師の話し合ったこと

①タイヤ遊びに夢中になった幼児は、一学期中他の遊びにはほとんど興味を示さなかった。例えば、母の日のプレゼントをみんなと相談してつくる時など、心はタイヤの方にばかり行き早くこの仕事を済ましてタイヤの方に行こうと落着いて出来ない。(二学期、三学期の半ばまで、ほとんど毎日)

このことに関して、幼児個人個人の検討がたびたびなされた。興味の持続がどの程度か、しばらく観察する。これにだけ集中していることが活動の片よりと見ない、いろいろな経験をしていると見てもよいし、今まで出来なかった活動を思う存分にしているのだから個人的にはかえってバランスがとれているのかもしれない。彼らの要求を満たすことのできるような他の遊びも考えてみる。などを話し合った。(プラネタリウム、大工遊び、三学期には絵を描くことに集中的に興味をもつ)

②タイヤ競争に関しては、グループが固定してしまうがそれでよいだろうか。

他の友だちとの交渉がほとんどなく、いつも同じメンバーばかりで遊んだ。内部でのけんかが起こったり、仲間はずれをつくったり、他の友だちにいじ悪をしたりするが、教師が、その時その時、中に入り、筋を通して話を聞いたり、助言をしたりして、一

学期の間はそのままのグループにしてみた。(二学期になり、グループが分裂し、また一緒になったりして、三学期にはおおぜいの友だちが加わり、友だち関係は広がった)

以上は一学期を通して遊ばれた遊びですが、次に六月の末に行なわれた遊びを紹介します。

教師が材料を用意し、幼児が発展させていった遊び

宇宙ごっこ

○初夏に入り、夜空をみる機会が多くなったので、古くからあった小型プラネタリウムを幼稚園の一室にセットし、星をみせてみようとして計画した。

○直径一mくらいの大きさなので、星が小さく見にくいのであまり関心は示さないだろうが、無理に誘いかけをしないように注意する。

○教師が中において、星の説明をしたり、簡単な星型のスライドを写して、幼児に話す。以上のことを話し合い、用意した。

第一日目

三、四人の男児が暗幕がはってあるので何だろうか、のぞきにくる。

「何するの」「映画館?」「お星さまをみせてあげようと思って用意したの」「へー昼なのに」「だから暗くしてあるのよ」「この

星は誰がつくったの」「ほら、円いこの筒に穴をあけて、中に電気を入れると、上にお星さまみたいな光がうつるでしょ」「機械でつくってみたのよ」などの会話がかわされた。

「本当の星は夜、空でみえるわね」

「じゃみんなよんでこよう」

「おい、星がみえるぞー」

暗い所に入る興味からおおぜいの子どもたちが集まる。狭くて一度に入ることが出来ないの、一列に並んで六名ずつくらい交代で入ることにした。

室内

「暗くておもしろい」「本当に夜みたい」「星がきれいね」「星がくまにみえるの?」「夜ほくのうちからもみえるかな」「お空のどこに星があるの」などの質問が出る。

一つ一つに答えながら、機械を操作していると、

Y「僕に電気つけさせて」

J「じゃ僕はブラネタリウムのスイッチ」

……と、自分たちで動かしてみたくなくなった。そこで順番に係をきめて動かしてみる。

待っている子ども

おおぜいで待つので退屈してしまい、女兒が中心になって待ち合い室をつくった。イスを並べて順番に坐って待っている。O子

は切符を作ってきてみんなに渡していた。ホールで遊んでいた、あめやさんの子どもがあめを売りにきたり、楽しそうになっている。順番に三十名くらいの子どもがみると、降園時間近くになったので今日はこれで閉店にすることにした。

降園前、今日おもしろかったという話し合いの中にブラネタリウムがとりあげられた。

明日もぜひやってみたいとの要望。

①機械は、順番に動かし、一人の人ばかりやってはいけない。

②入口に出入をさせる人をおく。

③待ち合い室の係をつくる。

④切符を売る人をつくる。

⑤ジュースやさんやうちわやさんを、あつかったからつくったらいい。

などの意見があった。

年少組では、

①お星さまがとてもきれいで明日も次も毎日見たい。夜になったら本もののお星さまを見よう。

②暗くてこわい。

③待っているところがおもしろい。などの発言があった。

第二日目

登園してきたK、一番にブラネタリウムの部屋にとびこむ。「僕

が一番」と張り切っている。Y「僕が二番、係になれたって」人数が揃うまで機械をいじっていたが、おおぜい揃うと、係の交代をきめて、始めることにした。女兒は切符づくりをしたり店やさんの準備をする。

タイヤ競争のグループも今日は、プラネタリウムにひきつけられる。星は一回説明をきいて、見ればもうつまらなくなるだろうと思っていたが、意外に人気があり、二回も三回も見にくる子どもがいる。

二時間ほど続けてしたが、あまり暑いので閉店にした。

同じような活動がその後三日続く。三日目にとりはずす。

Y「たのしみになっていたのにどうしてとっちゃったの」

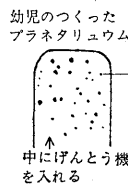
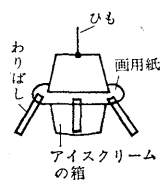
教師「この部屋本をたくさんおいてあるでしょ、あんまり長くおいておくと本を読みたい人に悪いでしょ」

Y「いやだよ、まだしたいよ」

K「そうだよ、まだしたいよ」

要望が強いので、またセットしてみた。子どもたちに操作をまかしていると、Y「そうだ、ここ宇宙にしないか」K「おもしろいおもしろい」」「宇宙ステーションが出てきたね」「宇宙ステーションつくろうよ」とみんなで製作の部屋へとびこんで行った。

プラネタリウムをとって宇宙ごっこにするかどうかを聞き、プラネタリウムは一応とることにした。



Y「ぼく、プラネタリウムをつくる」

「そしてステーションをとぼそうよ」

この日から製作活動に熱中する。ステーションをつくった子どもは、年長年少男児、十五名くらい。アイスクリームの箱を二ツ合わせ中は画用紙で円形をつくる。これはAが考える。

暗い部屋でプラネタリウムもつくってしばらく遊んでいたが場所をもっと広い所に移したいとの要望で、この部屋は前の本の

部屋に返すことが出来た。興味はステーションをつくることに集中され、宇宙ごっことしてはあまり発展しなかった。

★プラネタリウムに一番関心をもったのがYで、彼は大変な移り気で、あばれん坊だったが宇宙ステーションづくりまで、とても興味をもってこの遊びには毎日参加していた。家庭に帰っても本のプラネタリウムをどうしてもみるのだと渋谷まで両親につれていってもらったとの報告があった。

以上、私たちの幼稚園で遊んだ一学期の主な遊びの報告を、させていただきました。紙面の都合上、記録を簡単にまとめて記してしまっただころもあり、理解しにくいところがあると思いますが、

(相愛幼稚園)